

て俗に向へり、×××秦漢以來、彼是の間に依違して、一曲の内に局促せり、蓋し未だ嘗て是とする所を睹ざるなり。×××(荊漢微言卷末)

右自述する所、殆んど溢美にあらず、蓋し炳麟が中歲以後に於て得る所は、固より清學の能く限る所(圈内)にあらず。其の近年來の學界に影響する者亦た至つて鉅なり。然りと雖も、炳麟は家法の結習を謹守する事甚だ深かく、故に門戸の見、時に免るる能はず。小學を治めて、鐘鼎文龜甲文を排斥する如き、經學を治めて今文派を排斥し、其言常に過當なるを免れず、而して思想解放の勇決に對しては、炳麟或は今文家に及ばざるなり。

八 西 學

明の徐光啓、李之藻等算學天文水利の諸書を廣譯せる(梗概譯)を、歐籍の中國に入れる始とす、前清の學術、頗る其影響を蒙れるも、其圍範亦た天算に限れり。鴉

片戰爭以後、漸く外患に怵る、洪楊の役、(長髮賊亂)外力を借りて内難を平げ、益す西人の船堅く礮の利なるに震ひ、是に於て上海に製造局を設け、附するに方言(歐語)を廣むるの館を以てし、京師にも亦た同文館を設け、或は米國へ留學生を派遣するの舉あり、而して其目的は専ら通譯の人才を養成するにあり、其學生の志量亦た或は此業を逾る程の者もなかりき、故に數十年間の久しきに涉り思想界に絲毫の變化なし。惟だ製造局中に、尙科學書二三十種の譯あり、之れ李善蘭、華蘅芳、趙仲涵等の譯筆に依れるもの、其人、皆な根底ある學者なれば、譯書に對して、其責任心興味と共に極めて濃重なり。故に其成績、明の徐、李に比すべし、而して教會の中國にある者も、亦た頗る譯書あり。光緒間の新學家たる者、知識を世界に求めんと欲し、此等の書を以て、枕中の鴻秘となせり、蓋し學問の飢餓、是に至つて極まれり。既にして、甲午(日清戰)師を喪ひ舉國震動するや、年少氣銳の士は疾首扼腕して「維新變法」を言ひ、聶吏李鴻章、張之洞の輩の若きも稍之に和せり。其流行語

は、則ち所謂る「中國の學を體となし、西學を用と爲す」にあり、張之洞最も樂んで之を習導す、舉國以て至言となせり。蓋し當時の人、歐美諸國の製造能、測量能、若くば駕駛能(應用能)操練の能力以外に更に學問ある事を承認せず、故に其他の學問は惟だ譯書中に於て求めたるが故に、確かに他種の學問の見るべきものなし。康有爲、梁啓超譚嗣同輩は即ち此種の學問飢荒の環境中に生育せられ、冥思枯索以て一種の「不中不西、即中即西」の新學派を構成せんと欲して、已に時代の容れざる所たり。蓋し固有の舊思想は、根深く蒂固く、而して外來の新思想の來源淺微(薄)にして汲めば竭易く、其支細滅裂なるは固より其所なり。

戊戌政變(有爲、變法自疆の失策、光緒廿四年、補)繼ぐに庚子の拳禍(義和團事件を云ふ、光緒廿六年西紀一九〇〇年、補)を以てし、益、清室の衰微を暴露す。是に於て青年學子相率ひて學を海外に求む、而して日本地を接するの近きが故に、赴くもの尤も衆し。壬寅癸卯(光緒廿八九年、補)の間、譯述の業特に盛んにして、

定期出版の雜誌數十種に下らず、日本の一新書出づる毎に、譯者數家を動かし、新思想の輸入、火の茶に於けるが如し(蘆の穂)。然も皆な梁啓超式の輸入にして、組織なく選擇なく、本末を具せず、派別又明かならず、惟だ多きを以て貴となせり。而して、社會も亦た之を歡迎せり、蓋し久しく災區に處したる民の如く、草根木皮、凍雀腐鼠、之を甘しとせざるなし、即ち朶頤大嚼(何物をも擇ばずして口に入れ咀嚼する)して、其能く消化すると否とを問はず、又其結果の病に罹ると否とは問ふ所にあらざるなり。而も亦た實に衛生的良品を以て之に代ゆるに足るものなかりき。

時に獨り侯官の嚴復あり、先後譯せる者に赫胥黎の天演論。斯密亞丹の原富。

穆勒約翰の穆勒約翰名學 John Stuart Mill, Logic. 權巴羣界論 on Liberty (自由論)

孟德斯鳩法意 Montesquieu, The spirit of Law. 斯賓塞爾羣學肄言 Herbert Spencer

Introduction to the Study of Sociology. (補)等の數種、皆名著なり。之れ半ば舊籍

に屬し時勢を去る頗る遠しと雖も、然も、西洋留學生の本國思想界に與へて發生關

係したる者は、復た其首なり。亦た林紆なる者あり、小説百數十種を譯し、頗る時に流行す、然れども譯する所の書は率ね皆な歐洲第二三流の作家なり、紆は桐城派の古文を治めたる人、一譯を發する毎に、輒ち文に因て道を見るの（舊思想に囚はれたる）者、新思想に於て、もとより與る所なし。

晚清西洋思想の運動に於て最大不幸の一事あり。蓋し西洋留學生の殆んど全體は、未だ嘗て此運動に参加せず、其運動の原動力及び其中堅は、西洋の言語文字に通せざる人の手によりて行はる。此故に、其能力に限りあり、稗販、破碎、籠統、膚淺錯誤等の諸弊皆な免るる能はず、故に運動二十年に垂んとして、社會の輕んずる所となる。此點に就きて論ずれば、則ち疇昔の西洋留學生なる者は、深く國家に負く所ありと謂つべし。

要之るに、所謂る新學家なる者の失破せる所以の者は、更に一總の根原あり、曰く、學問を以て目的となさずして手段となせること之なり、時に主（清朝）方に利祿を餌

として天下を誘へるより、學校は、一變質の科擧、新學は亦た一變質の八股の如くなり、學子の學を求むる者は、其の十中の八九迄で、其動機已に純潔ならず、其學は但だ敲門磚（登龍門）の用と爲すのみにして、時過ぐれば、則ち之を抛つのみ。其下劣なる者に至つては、敢て齒牙にかくるに足らず。其高秀なる者と雖も亦た「致用」を以て信條となし、謂ふ、必ず學ぶ所を擧げて之を措かんか、乃ち學に負なしとなす。殊に學問のものたる、實に致用を離れたる意味にて獨立生存の價值あるを知らず、眞に所謂る「其誼（正道）を正し其利を謀らず、其道を明らかにし、其功を計らざるの」謂にして、之を質言すれば、書獃子（書狂）ありて然る後に學問の成る者あるなり。晚清の新學家に、盛清先輩の如き、經學の爲めに經學を治めたる精神の存在を欲せんか、即ち渺として得べからず、其學の成就する所なきは、亦た何ぞ怪むに足らむ。故に光緒宣統の交を稱して、只だ能く清學衰落期と謂ひ得るも、並びに新思想啓蒙の名は、亦た未だ敢て輕しく許さざるなり。

九 佛學

晚清の思想界に一の伏流あり、佛學と曰ふ。前清の佛學は極めて衰微し、高僧已に多からず、即ちよし有りとするも、亦た思想界とは無關係の者なり。其居士中に在りては、清初の王夫子頗る相宗を治めたるも、然も專攻の學にあらず。乾隆の時に至り、則ち彭紹升、羅有高の二人篤志信仰あり、紹升は、嘗て戴震と往復辨難せり、(東原集)其後龔自珍佛學を紹升に受け、(定庵文集、有知歸子讚)(知歸子は紹升を云ふ) 晩に菩薩戒を受く。魏源亦然り、晩年菩薩戒を受け、名を承貫と易へ、無量壽經會譯等の書を著せり。龔魏の二氏は今文學家の推獎する所たり、故に今文學家は、多く佛學を治む。石隸の楊文會は少くして曾國藩の幕府に佐たり、復た曾紀澤に隨つて英に使し、夙に心を内典に栖め、學問博くして道行高し。晩年金陵に息影し、専ら經を刻し弘法を以て事となせしが、宣統三年武漢革命の前、一日に至りて圓

寂せり、文會深く法相華嚴の兩宗に通じ、淨土教學者を以て、學者漸く之を敬信す。譚嗣同之に従ふて遊ぶこと一年、其の得る所を以て仁學を著す、常に尤も其友梁啓超を鞭策せしも、啓超能く深く造る能はず、されども顧みて亦た之を好み、其論著する所、往往佛學を推挹せり。康有爲本と好んで宗教を言ひ、往往己れの意を以て佛説を進退し、章炳麟も亦た法相宗を好みて、著述あり。故に晚清の所謂る新學者は、殆んど一として佛教に關係せざるものなし。而して凡そ眞に信仰ある者は率ね、文會に歸依せるもの多し。

經典の流通既に廣く、佛學を習得するに較容易となれり、故に研究者日に衆し、其中に於て亦た兩派に分つべく、則ち哲學的研究と、宗教的信仰是なり。西洋哲學既に輸入され、則ち印度哲學に對して、自然に連帶的興味を引起し來る、而して我國人は、歷史上此系の哲學と因縁極めて深かければ、自ら研究し易く、且つ全世界文化に對し應に此種の天職を負ふべく、有志者頗る自任を思へり。然れども其人極め

て稀に、其事業も尙ほ稱述すべきものなし。

社會既に屢、喪亂を経て、厭世思想、期せずして、自ら發生す、此惡濁世界に對し、種種の煩懣悲哀を生じ、一に安心立命の所を求めんと欲し、稍根器ある者は、則ち必ず遁逃して佛に入れり。佛教も厭世にあらず、本消極にあらず、然も眞に佛を學びて眞に能く積極的精神を以て之に赴きたる者は、譚嗣同の外、殆んど一二を見るに苦しむ。

佛學既に一種の時代流行をなすや、則ち之に依附して、名を高めんとする者出るに至る。而も往往夙昔の稔惡、(積惡)或は今方に熱中奔競するものありて、亦た自ら學佛に託し、今日經を聽き打坐せるものも、明日は驢貨人を陥るゝに至る。此等の輩、淨宗他力の教なる往生業を滅する一義を借り來り、其斷章の義を取りて、日惡を爲すに勇なり、稔惡の輩は一聲の阿彌陀佛を待み、其の一聲に依りて、前惡を前拔(洗拔)して餘す所なしとなす、之れ彼の羅馬教の極敵時に於て、其の懺罪の

犯罪と並行して悖らざるに何ぞ異ならむ。又た中國人中、迷信の毒もとより甚だ深かし。佛教の流行するに及んで、種々の邪魔外道の世を惑はし民を誣るの術、亦た随つて復活し、箕壇城に盈ち、圖讖牘(咒札)を累ね、佛弟子は曾て其の佛法の訶(譴責)する所たるを知らず、却つて之を推波助瀾(助勢の意)し、其だしきは、二十年前來の新學の鉅子にして、尙ほ津々として此道を樂むものあり。今に於て(此等の邪道を)變せずば、則ち佛學は將に思想界の一大障礙を爲さんとす、吾輩夙に佛法を尊ぶの人と雖も、亦た舌を結んで敢て復た言はざらんや。

蔣方震曰く。歐洲近世史の曙光に、自ら兩大潮流を發す、其一は、希臘思想の復活、則ち文藝復興なり。其二は、原始基督教の復活、則ち宗教改革なりと。我國今後の新機運、亦た當に兩途に従つて開拓すべし、一は情感的方面、則ち新文學、新美術なり。一は理性的方面にして、則ち新佛教なり。(歐洲文藝復興時代史自序)吾れ深く其言を嘉す。中國の佛教を有せる、深く之を惡む者と雖も終に能く之を遏絶する

能はず、其れ必ず社會思想の爲めに重要な成分となるは、疑ふべからざるなり。其果して社會を益するや、社會を害するやは、則ち新佛徒の出現して能く（其力を揮ふ）と否とにあるのみ。

更に所論すべき者を、基督教と曰ふ。基督教は本より吾が國民性に近からず、故に其影響頗る微なり。其最初に傳來せる者は、則ち舊教の耶蘇會一派なり。明の士大夫徐光啓の輩、一時信奉せしも、清に入りて轉衰し、重ぬるに、教案の屢、起れるを以て、人益之を厭棄するに至る。續いて新教渡來せるも、亦た其影響を受く。其後國人漸く相安きも、其教力歐洲に在りてすら已に日に衰退せり。各派の教會の國內に於ける事業頗る多く、尤も教育に注意す、然かも皆な舊に然く（保守的なるを云へるものか）精神に乏しく、數次の新思想の運動に於てすら、毫も參加せず、反つて間接に阻力あり。之を要するに、基督教の清代に於ける、咎も無く、譽もなし、今後も此の態度を改めずんば、則ち亦た淘汰に歸せんのみ。

欠

清代學術概論終

に、吾は極めて燦爛莊嚴なる將來の吾等の前に横はれる事を覺信す。

大東文心と云ふ書あり
著者 I.K. H.T.

欠

大正十一年十月二十七日印刷
大正十一年十月三十日發行

清代學術概論

定價金壹圓八拾錢

原著者 梁 啓 超 氏

譯補者 渡 邊 秀 方

東京市牛込區拂方町三十五番地

編輯者兼 石 倉 千 次

東京市麴町區紀尾井町三番地

印刷者 金 澤 求 也



發行所

東京市牛込區拂方町
振替三一二三八番

讀 書 院

電話番町三一六四番

發賣所

東京市牛込區拂方町
振替四七一〇番

二 西 社

電話番町三一六四番

今關天彭先生著 人文の淵源此にあり

支那人文講話

頁十七百三判六四製上
 錢拾參圓貳價定
 圓貳金價特
 錢二十料送

内容目次

- 文字の話 ●書籍の話 ●經學の變遷 ●文學の變遷 ●書道に就て ●宋以前の繪畫 ●宋以後の繪畫 ●小説戯曲一斑 ●道教の話 ●三代の金石 ●山東の壽石 ●支那最近の思想 ●清朝小説

讀書書院發行 東京市牛込區拂方町 電話番町三一六四番 一 西社發賣 振替口座 四七一〇

此書論ずる處千百の繪畫に勝る

東洋畫論集成

定價 金拾五圓
 送料 四拾五錢
 郵費 七拾五錢
 市内無配送料

天覽 文學博士 市村器堂 先生 德富蘇峰 先生 桂湖 先生 湖邨 先生 譯文總振假名附
 文學博士 瀧節庵 先生 益頭峻南 先生 今關天彭 先生 訂菊版千貳百卅頁

畫家は此書に據りて名畫家たるを得べく 繪紳は此書に據りて鑑識家たるを得べし
 見本往復葉書にて申込次第進呈

目書載收
 畫學秘訣(唐)王維著(歷代名畫記(唐)張彦遠)筆法記(梁)荆浩著(山水訣(宋)李成著)林泉高致(宋)郭熙著(圖畫見聞誌(宋)郭思著)畫繼(宋)鄧椿著(畫鑒(元)湯垢著)寫山水訣(元)黃公望)藝苑卮言(明)王世貞)畫禪室隨筆(明)董其昌)顧香館畫跋(清)惲培著)芥子園畫傳初集、沈心友芥子園畫傳二集、沈心友芥子園畫傳三集、沈心友芥子園畫傳四集、巢勳著)小山畫譜(鄒)一桂著)芥舟學畫編(沈)宗憲著)桐陰論畫(蔡)祖永著)桐陰論畫二、三、編)畫譜難助(仲)山高陽著)竹洞畫論(中)林竹洞著)鑿窟陸話(森)島長志著)鑿窟陸話卷の下の山中人饒舌(田)能村竹田)華山尺腹(渡)邊華山著)鑿窟陸話(安)西雲安著)鑿窟陸話(鑿窟陸話師著)發行所 東京市牛込區拂方町 電話番町三一六四番 讀畫書院 (與元帥邸横通り) 振替參壹貳參八番

我が史學に一新生面を拓きし空前の大作にして千古不磨の名著
 三又 竹越與三郎氏著
 洋裝頓天金總振假名菊判八百頁の大冊

増補訂正

二千五百年史

建國より幕府の衰亡に至る二千五百年間の史記、骨は文明史、肉は編年史、血は紀傳史、脈は哲學史、記述の筆は靈活明快、炬火の如き眼光、衡量の如き批評、描く所は政治、經濟、英雄、文學、美術、思想、宗教、社會風俗の變遷、參差錯綜の妙を極む。國民古今のパンラマ此にあり、東西を融合せる日本文學の一大產物日本歴史の大典此に備はる。永井教授曰く、竹越氏は恰もマコーレー卿の如し、氏の二千五百年史の如き、これをマコーレー卿の英國史に比ぶればその着眼の奇警にして文辭の雄麗なる點に於ては兩者その趣きを等うす、然もその批評の正しさに至つては遙に彼に優る。

定價七圓五錢
 特別價金六圓
 送料內地七錢
 郵費滿五拾錢

三又著名刊行會社
 振替四七〇一〇番

澁澤子爵曰、何人も此の哲理的修養あるを要す

三又 竹越先生 著

惜春雜話

洋裝頓天金四六版
 定價金貳圓
 送料金拾錢

●青春惜しむべし ●人生は美術なり ●凡ての人は失樂園を有す ●戀か家庭か功名か ●政治的功名心 ●友情は戀愛よりも重し ●英雄時代 ●自ら道路を發見せよ ●政治と黄金 ●我が敵は天の星我が友は地の砂子 ●道德臭からざる道徳 ●盆栽教育 ●如何なる書を讀まんか ●志は兼濟にあり ●彈力ある心性 ●選民主義以上十六編を合して一冊とし惜春雜話と題す

此書一道の活氣を國民に吹き込まんとする其の眞氣滋味恰も嫺々たる春風に浴するが如し、人草木にあらず人生牢獄にあらず苟も高尚にして意義ある生活を送らんとする者僞君子の虛高や道學先生の出來ない相談を棄て、此の書を讀まざるべからず。

三又著名刊行會社
 振替四七〇一〇番

高木信威氏著 ● 發行所 東京牛込拂方町二酉社
 振替四七一〇番

有為生活

定價金壹圓八拾錢 郵便小包料八錢

現代の青年に最も期待と同情との厚き著者は、理論と實際とを經緯として、愛を論じ、勇氣を鼓し、情を説き、理智を勵まし以て自己の人生を創造すべきを勸奨す。靈肉の融合、慈善精力の調和を期するは本書の目的にして、又是れ人生觀、又是れ常識道德の鼓吹也。哲學、文學、科學、藝術に出入し、往々著者獨創の見を立つ。智、情、意を併進せしめて、趣味あり意義ある生活を送らんと欲するもの一讀を忘るべからず、失意者は讀め得意者も讀め。

書翰の一事眞に士人に缺くべからざる修養にして
 琴歌坐作進退の婦人の禮節にも比すべく、書翰の巧拙に依りて士人文雅の程度を卜するを得べく候

長竹越先生 著

二又書翰

四六版約四百頁 定價金壹圓 郵送料拾錢

大阪朝日新聞曰

三十一一年以降公私の間に往復したる著者の書翰の數多き中より九十七篇を選輯したるもの尺牘文の模範とすべく、該博なる著者の識見が隨時隨所に發露せるは一種の文明批評として見るも面白き文集なり。

新修養曰

文を作る難し、殊に尺牘の文に至りては一層の至難を覺ゆ。三又先生の文、世既に定評あり、今書翰文集を手にし、益々先生の奇才妙文に驚服せざるを得ず、筆致精練、天馬空を行くが如く、人物を評し、政黨を論じ、亦哲學を説き、文學を語り、奇趣縱横、情景兼ね備はり、正に尺牘文の上乗なるもの、文體の亂雜に於ける今日以て模範とするに足る。

東京二酉社發行
 振替一七四〇番

杉浦俊香先生著 ● 東京市牛込拂方町 振替三一三三八番 讀書書院

畫界の維新

洋裝上製四版 定價壹圓貳拾錢 送料八錢

內容目次

●美を閑却せる世界改造は空想のみ ●至上美の本義を明かにす ●墮落せる我が畫界 ●佛國畫界の推移を顧みよ ●佛國に於ける十九世紀以後の畫風 ●迷宮に入れる我が畫界 ●學校の教は美術を衰滅す ●公設展覽會の多くは國民性を破壊す ●畫品の劣惡を嘆じて寸評を試む ●美術政策の謬は國家に及ぶ ●美術界の腐敗は速治を要す ●評畫計四

503
157

終